

古典の読み方

—『アリストテレス、アダム・スミス、マルクス』に寄せて—

折 原 裕

はしがき

第1節 アリストテレス：経済論の発生

第2節 アダム・スミス：アリストテレスとの対話

第3節 マルクス：アリストテレスへの回帰

第4節 現代への適用

むすびにかえて

はしがき

以下で取り上げる書物は、スペンサー・J・バック『アリストテレス、アダム・スミス・マルクス』¹⁾である。この書物は、4つのパートに分かれており、第1部が「アリストテレスの発生的な位置 (seminal position)」、第2部が「アダム・スミスが貨殖術、経済問題について行なったアリストテレスとのディベート」、第3部が「カール・マルクスのアリストテレスへの近代的回帰」、第4部が「21世紀のためのレッスン」と、それぞれ名付けられている。ここからすでに推察されるであろうが、この書物は、アリストテレスを経済論の創始者と位置付け、アダム・スミスをアリストテレスへのある種反対者とみなし、アダム・スミスを批判するマルクスをアリストテレスへの回帰と捉えている。本書はまた、そうした一連の古典への理解によって、アリストテレス、アダム・スミス、マルクスという3巨

人の遺産を、21世紀の現代に生かすという、意図を有するものでもある。

著者バックは、本書の序文で、次のように言う。「経済思想史の領域のいく人かの間では、経済思想史があまりにも重なり合い、まったく奇妙に込み入っているため、また、過去の経済理論家たちの著作があまりにも歴史的、背景的に特殊なため、今日の理論家に（もしあるとして）多くを提案したり、今日の問題や関心事を理解したり、ということには役に立たない、と論ずる傾向があることを、私は承知している。しかし、それは違う。過去の理論家たちは、彼らの主題の特殊な状況の、関連する歴史的修辭的な特異性に深く影響されるため、最もよく訓練された専門家を除いてあまねく、ひどく誤読され誤解されているのだ。」²⁾

バックによれば、経済思想史の専門家たちの古典へのアプローチは、往々にして、あまりにも慎重で、自信なく、臆病であり、効果がない。そうしたアプローチは、専門家気質の助けにはなっても、同時に、専門家特有の的外れに陥ってしまう。そうではなくて、もっと、言わば実用的に古典を読まねばならない、というのがバックの主張である。

バック自身の言葉によるなら、こうなる。「志ある経済学者は、たとえば、志あるクリスチャンが聖書を読まねばならないのと、大略同じ理由によって、アダム・スミスやカール・マルクスやアリストテレスのような人々の著作を読むことで、勇気付けられねばならない。これらの著作が、今日の社会のために、今日の人々のために、今日われわれに何を教えてくれるのか、を理解することによってである。」³⁾

次いで、バックは言う。「論証されるであろうが、スミスは、アリストテレスを読んで理解し、ある程度はアリストテレスに応答していた。マルクスは、アリストテレスとスミスの双方を読んで理解し、ある程度は双方に応答していた。それゆえ、アリストテレス、スミス、マルクスの間には、ある意味での対話、ないしは、言葉の本来の意味での弁証法があった。アリストテレスは、古代世界の偉大な体系家であった。スミスとマルクスは、

近代世界の偉大な体系家のふたりであった。アリストテレス、スミス、マルクスは皆、偉大な体系創始者とみなされるけれども、この場合、それらは衝突の模範ではない。彼らは、彼らの通約不能の相違によって、完全に互いに（21世紀の読者たちも含めて）避けられている。むしろ、論証されるであろうが、3つの体系は、相互に親密に関係しており、われわれに親密に関係しているのだ。⁴⁾

こうして、経済論の伝統が、アリストテレス、アダム・スミス、マルクスという順に検討されることになる。

第1節 アリストテレス：経済論の発生

パックの整理によれば、アリストテレスにとって富とは、第一義的に、使用価値であった。だから、アリストテレスの場合、使用できないような大きさの富は、意味がない。アリストテレスによれば、善き人生に必要な財産の額は無制限ではないし、家計や国家に用いられる富は限定される。

そうだとすれば、あらゆる富と交換できる貨幣もまた、必要以上に持つべきものではない。多くの人が、財産を貨幣の量で評価するが、それは富を貨幣と混同する誤りに陥っている。アリストテレスにとって、貨幣とは、何よりも先ず、流通手段としての機能を果たすべきものであった。

アリストテレスにおいても、社会は分業によって成立しており、商業が行なわれ、商業のために貨幣が必要になる。ところが、アリストテレスの場合、富を獲得する方法として、自然であるとされるのは、狩猟、牧羊、農耕のような、自然それ自体に働きかけて使用価値を獲得するものであり、商業のように、人間相互の取引から富を獲得するものは、不自然であるとされる関係にある。だから、アリストテレスの理解では、商業を通じて富を増大させること、商業から利益を引き出すことも、不自然であることになる。パックが指摘するように、「商業を通じた貨幣の獲得は、アリスト

テレスにとって、富の真の創造や生産ではない。それはむしろ、根本的には、一人の人間から他の人間への富の再配分である⁵⁾ということになるわけである。

ここから、次のようなアリストテレスの発言も出てくる。「貨殖術には二種あって、そのうち一つは商人術で、他の一つは家政術の一部であり、後者は必要欠くべからざるもので、賞賛せられるべきものであるが、前者は交換的なもので、非難せられて然るべきものである〔……〕。従って憎んで最も当然なのは高利貸しである。それは彼の財が貨幣そのものから得られるのであって、貨幣がそのことのために作られた当のものから得られるのではないということによる、何故なら貨幣は交換のために作られたものであるが、利子は貨幣を一層多くするものだからである。〔……〕従って、これは貨殖術のうちで実は最も自然に反したものである。」⁶⁾

アリストテレスにおいては、より多くの貨幣を獲得するための商業や貸付業は、不自然な「貨殖術 (chrematistic)」として非難されるだけでなく、アリストテレスに特有な中庸の倫理観からも、不適切なものとして非難されることになる。

アリストテレスにおいて、徳は卓越性であるとされ、その卓越性は、言わば上に凸な放物線の頂点であり、両極端の中間にある頂極である。たとえば、勇敢という徳は、平然と恐怖との中間、中庸にあり、平然が過ぎれば無謀となり、恐怖が過ぎれば怯懦となる。同様に、節制は放埒と鈍感との中庸に、矜持は倨傲と卑屈との中庸に、親愛は阿諛と憎悪の中庸に、ということになる。

経済論との関連で見ると、鷹揚という徳があり、放漫と吝嗇との中庸であるとされている。放漫な人は、金銭を、しかるべき以上に、しかるべきでないときに費やす人であり、吝嗇の人は、金銭を、しかるべき以下に、しかるべきときに費やさない人である。だから、おそらく、この鷹揚の徳の見地からしても、貨幣の飽くなき追求としての貨殖術は、行き過ぎて不

徳になるであろう。

ただ、アリストテレスは、より多くの貨幣を求める貨殖術への非難を、正義という徳との関連でも行っており、むしろこの正義との関連の方が、重点をなしている。アリストテレスの正義には、法に則する正義と、対他的な正義があり、貨殖術との関連では、対他的な正義が問題になる。

パックの述べるところでは、アリストテレスにとって、財の交換における正義とは、公平であり、他者にも有利に働くものである。他方、不正義とは、不公平であり、貪欲であって、財の交換において、あまりにも多くを欲望するものである。それゆえ、正義と不正義とは、相互的な性質を持つ。2者間での財の交換で考えれば、多過ぎる財を手にする者があれば、彼は不正義であり、その結果少な過ぎる財を手にする者は、不正義な行為をされたことになる。

だから、アリストテレスの場合、2者間で利益も損失もないのが、正義であり、利益や損失を伴う取引は、不正義にならざるをえない。アリストテレス自身の言葉によるなら、こうなる。「損失と利得というこれらの名称は本意からされる取引から由来した言葉である。すなわち、買ったり、売ったり、その他、法律が自由な取り決めに許しているかぎりの行為においてそうであるように、自分の分より大きなものを得ることが得をすると言われ、初め持っていたものより小さなものを得ることが損をすると言われる。これに対して、今までより大きなものも小さなものも得ることがなく、自分自身によるものだけが得られる場合は、自分の分を得ると言われ、損をするとも得をするとも言われない。／したがって〔……〕正しさとは何らかの意味における利得と損失の中間であり、前も後も等しいだけのものを得ることである。」⁷⁾

そういうわけで、アリストテレスにおいては、より多くの貨幣を獲得するための貨殖術は、利得という自らの存在理由のゆえに、正義にかなわない。それに加えて、本来流通手段である貨幣の不自然な使用である、とい

う非難が重なってくる。

ところで、バックの言によるなら、アリストテレスにとっての自然は、不自然と対抗しながらも、不自然と矛盾する関係にはない。アリストテレスの場合、矛盾とは媒介項を持たない対抗関係であるが、自然と不自然との間には媒介項があって、両者は互いに対立者に移行しうるものとされている。それは、あたかも、覚醒と睡眠とが対抗しながらも、人が、多かったり少なかつたり覚醒し、多かったり少なかつたり睡眠する、というのと同様である。健康と病気、美と醜なども、そうした対抗関係にある。バックの表現によれば、「物事が自然か不自然かのどちらかに分けられ勝ちな、われわれの日常的言語用法は、自然が〔不自然と〕媒介物を持たない矛盾にあることを意味する。アリストテレスにとってはそうではない。それどころか、アリストテレスにとっての自然は、不自然に対抗しながら、その対立者である不自然に移行する傾向を有している。」⁸⁾

したがって、貨幣の使用についても、自然な使用と不自然な使用と、両者の間に媒介項がありうることになる。つまり、自然は往々にして、言わば地続きの不自然に転化してしまう。「事物は、その素質を満たすとき自然であり、悪くなり、腐敗するとき不自然である」⁹⁾という関係になるのである。

そして、この問題には、アリストテレスの原因論というものも、関わってくる。バックの見るところ、アリストテレスの原因論によれば、最も重要な原因は目的因である。だから、貨幣の使用について考える場合も、流通手段であるという、貨幣の目的因が最重要になる。バックの言うように、「財を流通させ、交換過程を容易にするのが貨幣の真の目的ないし本性であるなら、貨幣がその機能や目標から逸脱するとき、それは不自然」¹⁰⁾ということになるわけである。

さらにまた、貨幣の不適切な使用が、人間の徳性を歪めてしまうという論点も付け加わる。バックの説明によれば、アリストテレスの見るところ、

貨幣が大部分、より多くの貨幣の獲得を目的として使用される社会では、賢く消費することは、困難になる。一方では、貨幣自体が欲望の対象になるから、働き過ぎや貨幣蓄積への切りのない衝動が生ずる。他方では、身体の欲望のための過度の貨幣支出が生ずる。どちらも、人間の幸福や善を増大させるものではない。

アリストテレス自身の言葉では、こうなる。「この種の貨殖術から生ずる富には限りがないのである。〔……〕貨幣から成り立つ財産を失わぬようにしなければならぬ、あるいは無限に殖やさなければならぬと絶えず思うのである。そしてこの気持ちの原因は善く生きることではなくて、ただ生きることに熱中するところにある。〔……〕例えば勇氣のはたらきは財を作るのではなくて、大胆を作ることである。また將軍術や医術のはたらきもそうしたのではなくて、前者のは勝利を作ることであり、後者の健康を作ることである。しかるに或る人々はこれら凡てのものを財を作る手段にする、彼らはこれを目的であるかのように考え、凡てのものはこの目的に仕えねばならぬかのように思うのである。」¹¹⁾

バックの叙述によれば、アリストテレスにとって、人間の幸福や善は、飽くなき欲望の追求や過剰な消費の下ではなく、中庸を得た、正しい欲望と正しい消費の下で、初めて可能になる。アリストテレス自身の言葉では、こうである。「『倫理学』において幸福な生活とは徳に従って何ものにも妨げられずに営まれる生活であり、そして徳とは中間〔中庸〕であると言われたが、もしこれが正しいならば、中間の生活が最善の生活でなければならぬことになる〔……〕。もっとも、この中間というのは各人の到達しうる〔誰でも達成できる〕そのことであるが。」¹²⁾

このように、アリストテレスにとって、人間の幸福は、徳の実現にある。人間を取り巻く様々な生活条件は、幸福それ自体の内実ではなく、徳の必要条件として求められるに過ぎない。

だから、アリストテレスの場合、経済論もまた、徳の実現としての、善

き人生のためにあった。バックの言うように、「経済的な考慮それ自体、最終目標としての善き人生のためにあり、実際、アリストテレスにとって、この最終目標が最重要でもあった。」¹³⁾そしてまた、アリストテレスにとって、国家の存在理由も、善き人生の達成のためにあった。アリストテレスの場合、「国の目的は善く生きること」¹⁴⁾なのである。

そして、ここで想起されねばならないのは、またしても、アリストテレスにとっての中庸の重要性である。バックの述べるように、「アリストテレスは彼の全集を通じて、中庸の重要性を強調している。」¹⁵⁾このことが、アリストテレスの描く国家像にも反映してくる。アリストテレスは、富者と貧者という両極ではなく、両者の中庸たる中間階級の増加や強化こそ、国家の理想だと言う。

アリストテレス自身の言では、こうなる。「どの国々においても、国の三つの部分、すなわち非常に富裕な人々と非常に貧乏な人々と第三にはこれら両方の中間の人々とがある。従って、適度なものと中間的なものとが最善であるということが一般に認められているのであるから、幸運の賜物にしてもその中間的な所有が何ものにもまして最善であるということは明らかである。何故ならその程度の所有は理性に最もたやすく従うが、過度の美しさとか、過度の強さとか過度の善き生まれとか過度の富とか、あるいはそれらと反対に、過度の貧しさとか過度の弱さとか非常な賤しい地位とかをもつ者は、なかなか理性についていきにくいからである。〔……〕だからして国内共同体にしても、中間的な人々によって構成されたものが最善であり、そして中間的な部分が多数で、できれば、その両端の部分より強力であるか、できなければ、そのいずれの部分より強力であるかするような国々に善き政治が行なわれうるということは明らかである。」¹⁶⁾

以上のように、アリストテレスの経済論は、中庸という概念を軸に、徳を目指すものであり、より多くの貨幣のための貨殖術を容認しないものであった。そして、アリストテレスの理想国家も、階層としての中庸を重視

し、中間階層の増加や強化を主張するという特徴を有していた。

第2節 アダム・スミス：アリストテレスとの対話

バックによれば、アダム・スミスは「もともと『国富論』を、アリストテレスとともに始めており、交換価値と使用価値とのアリストテレス的な相異から始めている。」¹⁷⁾しかしながら、バックの述べるところ、アダム・スミスは、より多くの貨幣を獲得するための貨幣の使用については、アリストテレスと袂を分かって、そうした貨幣の使用を、自然（natural）であるとした。

バックが言うには、スミスは、利潤を獲得するために資本を用いて労働者を雇う人々を、マルクスのように資本家とは呼ばず、またスミスは、利潤のための資本の使用に基礎を置く社会を、マルクスのように資本主義社会とは呼ばなかった。スミスの用語は、資本家の代わりに、商人、資本主義社会の代わりに、商業社会ということになる。

そして、バックによると、その商業社会は、『国富論』の展開のこここで、自然に満ちた社会として描かれている。いわく、ビーバーが鹿の2倍の価値を持つのは自然。いわく、激しい労働に対する配慮は自然。あるいは、このスミスの発言。「ある商品の価格が、それを産出し、加工し、市場に持ってくるのに使用された土地の地代と、労働の賃銀と、資本の利潤とを、それらの〈自然〉率によって支払うのに足りるだけの額よりも、多くも少なくもないならば、そのときその商品は、その〈自然〉価格と呼んでいいもので売られている。（強調はバックによる、以下同じ。）」¹⁸⁾さらにはまた、『国富論』の書名『諸国民の富の原因と〈性質〉(Nature)に関する研究』

バックに言わせると、スミスは、アリストテレスに対する反論を、自然という言葉の繰り返しによって、行なっているかのようである。「ある意

味スミスは、アリストテレスに対する独断的な反論を、断言と反復によって行なっている。あたかもスミスは、アリストテレスとの議論において、議論に勝つための戦略を、同じ指摘を繰り返し繰り返し行なうところに、置いているかのようなのである。〔……〕スミスから、自然とか自然にとかの言葉を引用しようとするれば、うんざりするほどになる。」¹⁹⁾そう言うのである。

要するに、バックの見るところ、スミスにとって、商業社会の全体が自然なのであった。

一方で、バックは、スミスの言う自然と、アリストテレスの自然と、含意が異なる点に注意を促している。「スミスは常に、自然という言葉を、正常、通常、必然的、ないしはそれらのバリエーションとして用いている。」²⁰⁾アリストテレスの場合、自然は善でもあったから、両者の自然は、明らかに異なるわけである。

とは言え、スミスが、アリストテレスと相違して、商業社会の秩序全体を自然と捉えていたことには、変わりがない。それは、直ちに、アリストテレスとは違って、貨幣を獲得するための貨幣の使用それ自体を、悪ではなく、自然であると解することを意味する。だから、バックはこう言う。「アリストテレスとは異なり、スミスは、より多くの貨幣を獲得するための貨幣の使用について、悪でも不適切でも全然ない、という見解だった。」²¹⁾

スミスの場合、自然は、善悪を越えるので、それ自体善ではないけれども、同時に悪でもないから、とりあえず肯定されるべきものとなる。その限りにおいて、貨幣を獲得するための貨幣の使用も、貨殖術ではなく資本として、肯定される関係になるわけである。その延長上に、スミスの場合、利子を目的とした貨幣の貸付も、肯定されることになる。スミスにおいては、「アリストテレスに対立して、利子のために貨幣を貸すことは、完全に自然」²²⁾だったのである。

スミスが経済学者として説く商業社会では、資本が獲得する利潤や利子は、社会全体の生産性向上に寄与するものと考えられているから、それ自体悪でありえないのは当然であろう。他方、スミスが道徳哲学者として説くモラルの領域では、どうなのだろうか。

バックによれば、スミスのモラルの領域での発言の多くは、アリストテレスに追随している。スミスは、アリストテレスに従い、徳は卓越性であるとしている。また、スミスは、アリストテレスに倣い、中庸を得ることが重要だとしている。そしてまた、スミスは、アリストテレスと同様、徳の形成に果たす教育の役割を重視している。等々。

だが、商人や商業の評価という点になると、スミスはアリストテレスと袂を分かって、商人や商業を不自然ではなく、自然で、社会に役立つものと見ていることは疑いえない。スミスは、製造業と並んで、商業に重要な意義を見出していた。「スミスが是認し信じたのは、商業と製造業は、資本対賃労働の関係は、社会に有益だということだった」²³⁾のである。

バックによるなら、スミスの次の発言も、そうしたスミスの論点に関わる。「商業と製造業は、農村の住民のあいだに、秩序とよき統治を、またそれとともに個人の自由と安全を、しだいにもたらしたのであって、以前には彼らは隣人とほとんどたえまのない戦闘状態にあり、領主にたいしては奴隸的従属状態にあったのである。このことは、ほとんど注目されてこなかったけれども、商業と製造業がもたらしたすべての効果のなかでも、もっとも重要なものであった。」²⁴⁾

このような、商業と製造業への評価は、資本の利潤や利子への評価と並んで、スミスとアリストテレスとをくっきりと分け隔てている。それは、言うまでもなく、スミスの立論が経済学者のそれであり、商品経済の法則性という見地から経済社会をトータルに分析することに主眼が置かれていることによる。スミスの経済論は、アリストテレスのように、一定の倫理観から経済社会のそこそこを批評するという性格のものではないのである。

ところで、バックによれば、スミスの経済論にも、アリストテレスの経済論と類似した部分は見つけ出すことができるという。それは、経済活動が人間の徳性に与える影響という点に関わっている。

スミスは、商人や製造業者たち、つまり資本家たちが、ときとして、公共の利益に反する行動を取るという指摘を行なっている。たとえば、次の発言である。「商人と親方製造業者は〔……〕しばしば大部分の郷士（country gentleman）よりも鋭敏な理解力を持っている。しかし、彼らは、社会の利益よりも自分たち自身の特定部門の事業の利益について思考をめぐらすのがふつうである〔……〕自分たちの利益についての知識のこの優越によって、彼らはしばしば郷士の寛大さにつけこみ、郷士の利益ではなく自分たちの利益が、公共の利益なのだというまことに単純ではあるが正直な信念から、郷士を説得して彼の利益をも公共の利益をも放棄させてきたのである。」²⁵⁾

バックの見るところ、こうしたスミスの発言は、アリストテレスに一脈通ずる観点であり、また、経営者の腐敗という現代の問題に通ずる観点でもある。「われわれの現代において、たとえば、化石燃料産業は、いんちき科学者を支持して、彼らの生産物の人類による消費が気候変動を引き起こさないと、われわれに信じさせようとして、いんちき研究機関を創設したり、あるいは、会社が最も輝かしい心理学者を雇って、われわれの健康に有害な彼らの生産物をわれわれに買わせるよう仕向けたり、こうしたことは、スミスに指摘された、著しく予見的で、適切かつ妥当な点である。」²⁶⁾ こうバックは言うのである。

さらにまた、バックによると、労働者の墮落というスミスの指摘も、経済活動が人間の徳性に影響を及ぼすという観点を含んでいる。

たとえば、スミスの次の発言である。「仕事と道具を半時間ごとに変え、生涯をつうじほとんど毎日二〇ものちがうしかたで腕を使わねばならない農村のすべての職人が自然に、あるいはむしろ必然的に身につける、たど

たどしく、ぶらぶらと不注意に仕事する習慣は、彼をほとんどつねに不精で怠惰にし、もっともさしせまったばあいにさえ、活発に働くことができないようにしてしまう。」²⁷⁾

しかしながら、バックの見るところでは、経済活動が人間の徳性に与える影響という観点からするなら、重要なのは、労働者の墮落ではなく、資本家・経営者の腐敗である。バックの次の言葉が、それを示している。「スミスを丹念に読むと、彼が商業社会における3大階級すべての性格類型に関して、厳格な留保を付していることが分かる。おそらく、多分に問題なのは、資本家の性格類型である。親方製造業者や商人、すなわち資本家は、貪欲から嘘をついたり、大衆をまどわせたりする。これはまさしく、アリストテレスのような人が予期した、個人の徳性の崩壊の一種に見える。」²⁸⁾

以上のように、スミスの経済論は、商人や製造業者の役割を評価し、彼らが資本家として獲得する利潤や利子を自然として肯定する点で、アリストテレスと隔たったものだった。ただ、経済活動が徳性に影響を及ぼすという観点では、アリストテレスと共通する一面を持っていた。

それに付け加えて、バックは、スミスが自由放任主義者ではなかったと指摘する。バックは、『国富論』第5編にある、国民の武勇の精神を政府が涵養すべきだというスミスの議論を紹介しつつ、このように言う。「スミスによるこの種の発言は、厳格で独善的なレッセ・フェールに反する、あらゆる種類の公共福祉促進政策に道を開くものである。」²⁹⁾バックの述べるところでは、「多くの点で（完全にすべてではなく）資本主義社会における国家の役割についてのスミスの立場は、20世紀合衆国の自由民主主義者の立場に近い。[……] 国家の機能についてのスミスの一般的アプローチは、たぶん、リパタリアニズムより、福祉国家リベラリズムに近い。」³⁰⁾

バックのこの論点は、先ほど垣間見た、経営者の腐敗という現代の問題に、スミスの発言を適用しようという、バックの著作の第4部に結びつい

てゆくことになる。

第3節 マルクス：アリストテレスへの回帰

冒頭にも触れたが、バックは、スミスを一時的にアリストテレスへのある種反対者とみなし、スミスを批判するマルクスを一時的にアリストテレスへの回帰と捉えている。第2節ですで見たとおり、スミスが一時的にアリストテレスに対してある種反対者の立場になるのは、集約すれば、より多くの貨幣を獲得するための貨幣の使用（アリストテレスの言う貨殖術）をどう価値判断するかに限定されると考えてよい。だとすれば、バックが言う、マルクスのアリストテレスへの回帰も、貨殖術への価値判断に限定される他ないであろう。（経済活動が徳性に及ぼす影響は、たぶんスミスの場合、マイナスの影響より、プラスの影響の方が重要だろうから、この点でも、スミスは一時的にアリストテレスに同調しないだろう。）

バックも認めるように、「マルクスはスミスを、古典派経済学（political economy）の、おそらく頭目とみなしており、最も有能な代弁者とみなしている。」³¹⁾他方、スミスを高く評価するからこそ、かえってマルクスは、スミスを深くまた網羅的に研究して、結果、スミスを根底からまた幅広く批判する関係になる。それゆえ、マルクスの広範なスミス批判の中で、貨殖術に関わるものは、もともと重要なものではありえない。

だから、アリストテレスからスミスを経てマルクスにいたる、バックの論理は先細りにならざるをえない。（バックによる3者の比較は、商品の通約可能性、歴史等々についての3者の見方にも及ぶので、議論の展開そのものは先細りにならないけれども、事実上、論理のかみ合う部分は、貨殖術に関わるものに限られる。）

ともあれ、バックは、マルクスの次の叙述を引用する。「貨幣はそれ自身商品であり、だれの私有物にでもなれる外的な物である。こうして、社

会的な力が個人の個人的な力になるのである。それだからこそ、古代社会は貨幣をその経済的および道徳的秩序の破壊者として非難する。[……]近代社会は、黄金の聖杯をその固有の生活原理の光り輝く化身としてたたえるのである。」³²⁾

そして、この引用に続けてバックは、こう言うのである。「マルクスは、あまりに多くの社会的な力が個人的な人の私有の力となることに、本質的に反対だった。私見によれば、その理由によって、マルクスは基本的に、アリストテレスや古代人を支持し、スミスや力強い私有的近代人に反対だった。」³³⁾

バックは、マルクスの上の引用が、古代と近代とを区分けしているのかごとくに読んでいるようであるが、そこには無理がある。むしろ、上の引用は、貨幣への希求が古代から近代へと連続している事情を背景にして、貨幣蓄蔵を説明したものであろう。

そしてまた、バックも気付いているように、マルクスは、人格と経済的な行動と、両者を切断し、人格が経済的な行動に及ぼす影響を捨象する方法を取っている、という点も忘れてはならない。その点に関して、バック自身も次を引用する。「第1版への序文で、マルクスが言うには、『ここで人が問題にされるのは、ただ、人が経済的諸範疇の〈人格化〉であり、一定の階級関係や利害関係の担い手であるかぎりでのことである。』」³⁴⁾

さらにまた、バックは上に続けて、次も引用している。「本文でマルクスが言うには、『人々はただ互いに商品の代表者としてのみ、したがって、商品所持者としてのみ、存在する。一般に、われわれは、展開が進むにつれて、人々の〈経済的扮装〉はただ経済的諸関係の人化でしかないのであり、人々はこの経済的諸関係の担い手として互いに相対するのだということを見いだすであろう。』」³⁵⁾

これらの引用が示すのは、マルクスが、少なくともその経済理論の枠内では、人格を考慮の外に置いているということである。だから、スミスを

批判するマルクスがアリストテレスへの回帰であるというパックの論理は、貨殖術を肯定したスミスをマルクスが批判しているという論理は、マルクスその人の議論に即して無理である。

むしろ、別の箇所でパックが、資本家の徳性との関連でマルクスに言及している次こそ、妥当であろう。「ここで重要なポイントを書きとめておく必要がある。資本家の目的が蓄積であるというマルクスがもし正しいならば、長期的には、経済成長を条件付ける貯蓄には何の問題もないことになる。(もし)資本家が生産物を売ることができるならば、彼は、貯蓄を、ないしは価値を、剰余価値を、獲得するだろうからである。生産物の価値は、労働者から収奪した剰余価値を含んでおり、その剰余価値は、資本家が貯蓄し、蓄積し、拡大規模で再生産するのを可能にする。」³⁶⁾

要するに、マルクスの経済理論の中では、資本家にせよ、労働者にせよ、あるいは金貸しにせよ、すべてが、人格抜き、純粹に経済的な役割としてのみ演じられる。だから、そこには、道徳的な見地から、つまり個人の人格を問題とする見地から、貨殖術を断罪するような論は出てきようがない。それは、スミスの経済理論の方法を、マルクス流にはあるが、徹底させることでもあった。

だから、パックが労働者の徳性に関連して、次のようにマルクスを援用することにも、無理がある。「マルクスは、スミスを引用して〔……〕言う。『マニュファクチュア的分業は〔労働の社会的生産力を、労働者のためではなく資本家のために〕各個の労働者を不具にする〔ことによって、発展させる〕。それは、資本が労働を支配するための新たな諸条件を生み出す』」³⁷⁾ここで、マルクスが述べているのは、資本主義的生産の下での労働者の部分労働者化が、スミスが希望したように教育で克服できる類のものではなく、資本主義的生産につきものの過程であって、むしろ資本主義的生産の推進を下支えするべきものである、という点だからである。

ある意味当然なのであるが、マルクスの経済理論の方法は、スミスが切

り拓いた経済理論の方法を徹底するものであり、したがって、スミスの理論体系になお残存する商品経済外的な諸要素は、マルクスの理論体系では極力排除されているのである。膨大とも言えるマルクス『資本論』体系には、様々な要素が詰め込まれており、また、その叙述の中には、言うならば本線の論理からやや逸脱したものもあるため、色々な読み方が可能になる箇所もないではない。ただ、パックのように、マルクスが貨殖術をめぐってスミスを批判してアリストテレスに回帰し、あるいは、マルクスが経済活動の徳性への影響をめぐってはスミスに同調しそれゆえアリストテレスにも同調した、というのは明らかに無理なのである。

第4部でのパックの議論の一部を先読みすれば、パックは、次のように述べている。「マルクスにとって、資本家の性格は純粹にアリストテレス的だった。貪欲に飲み込まれ、より多くの貨幣を獲得する欲望に駆り立てられて、他の資本家との競争もあって、より多くの貨幣を獲得するための貨幣の貨殖術的使用は、資本家の徳性を破壊する。マルクスにとって、資本家とは、内的小および外的に、蓄積、貯蓄、再投資、および、被雇用者を最大限働かせることに、駆り立てられる者である。スミスの場合と同様、資本家は嘘つきで、大衆を誤らせようとする。」³⁸⁾

こうしたパックの議論も、マルクスのテキストの本筋から逸脱しており、妥当性を欠く。マルクスの描く資本家から読者が喚起されるイメージがどうであれ、それは、資本家の人格の問題ではない、というのがマルクスの立場だからである。パックの議論は、アリストテレス、スミス、マルクスと時代が近づくに連れて、無理が多くなる。特に、マルクスについて、無理が際立つ。

第4節 現代への適用

「21世紀のためのレッスン」と名付けられた第4部には、パックの次の

文章がある。「21世紀の最初の数年に、主要な経営者の収入と富の著しい増加は、単なる楽しみや娯楽の種のように見える。たとえば、ディズニーの社長がどうやって1億4000万ドルの退職金を14箇月の仕事の後に受け取ったかを、人々は新聞で読むことができた。あるいは、モルガン・スタンレーの副社長がどうやって3箇月で3200万ドルを受け取ったかを読むことができた。」³⁹⁾

つまり、パックの言う21世紀は、何よりも先ず、資本家の貪欲があらわになる世紀である。上に続けて、パックは言う。「主要な経営者にはいくつかの大きな問題がある。ひとつには、彼らは剰余価値の莫大な額を、財産収入を、収奪している。[……] 役員報酬についての研究によれば、『上場企業のトップ・ファイブの役員の報酬の合計は1993年から2003年の間に、3兆5000億ドルにのぼった。トップ・ファイブの役員報酬が、これら企業の収益に占める比率は、2001年から2003年で9.8%であり、1993年から1995年に比べ、5%上昇した。』すなわち、トップ経営者によって収奪される剰余価値（利潤）の額は莫大であり、20世紀の最後の10年から21世紀の最初の10年を通じて増加した。」⁴⁰⁾

さらに、パックが続けて言うには、問題は資本家・経営者の貪欲だけではない。「スミスが予言したように、経営者には一般的な公正さと能力についても、重大な問題がある。他の人々の金銭を運用する人々である、フィナンシャル・サービス部門の経営者は、とりわけ倫理的かつ管理的に問題であるように見える。たとえば、新聞を読むと、『メрил・リンチは昨年270億ドルの損失をこうむったが、バンク・オブ・アメリカにテイク・オーバーされる以前まで、140億ドルの年度末賞与に見合う経営を敢行した。』[……] この事態は、それらを許したバンク・オブ・アメリカの経営者、最高幹部の能力ばかりではなく、メрил・リンチの経営者の公正さと徳性にも、疑問を生じさせる。[……] さらに、西側諸国の経営者たちが自ら自身をより富ませるために貨幣を使用する程度に応じて、様々な政府

が貨幣を私企業に貸し付けている。[……] アリストテレスの観点からするなら、これらはある程度まで予測できた。他人の資源によって自分を富ませる習慣を持つ人々に貨幣を与えるなら、彼らはその悪い習慣を発展させて、さらに自身を富ませるために新たな貨幣を使用するであろう。[……] 私見であるが、いつかは習慣を変えうるために、これらの経営者の何人かが収監される、可能性と現実性の時期にきているのではないか。』⁴¹⁾

このように、パックの見るところ、資本家・経営者の貪欲と不公正は目に余るものである。そればかりではなく、こうした資本家・経営者に利するような言論も目に余るという。それは、貯蓄の不足が存在するという言論であり、それを論拠に貯蓄への課税を軽減すべきだという言論である。これらは、パックによれば、詭弁でしかない。そうした貯蓄課税の軽減とは、財産や財産収入への課税の軽減に他ならず、裕福な人々への課税の軽減に他ならないからである。パックによるなら、貯蓄の欠乏は、今日的には最小の問題に過ぎない。

貯蓄に関する詭弁と同時に、社会保障に関する詭弁も目に余るとパックは言う。社会保障を私的なものにすべきだという議論は、そうすれば貯蓄率が増加するからだ、という。パックは、それが詭弁だと言う。「もし、社会保障が私的なものとされるなら、人々がより低くないしはまったく社会保障税に支払わないならば、収入を金融資産に投資するならば、統計上の『貯蓄』は増加する、というのは事実である。だったら、どうなのか？人々は、引退後に、必ずしも資産的により安全になりはしないし、もっともありそうなことだが、逆になるだろう。さらに、そうしたことは、経済成長を必ずしも促進しないのである。』⁴²⁾

資本家・経営者の貪欲の今日的なあり方は、国家や政府の今日的なあり方と結び付く。

パックによれば、歴史を循環するものと見るアリストテレスの理解では、「良き政府、自然な政府が、墮落する傾向、腐敗する傾向、悪くて不自然

な政府に変わる傾向が、いつでもある。」⁴³⁾しかし、政府が良き政府、自然な政府ならば、「政府は、市民が単なる人生、単なる生存ではなく、良き人生、卓越した人生を送ることができるように、市民が卓越性を発展させるのを助ける。」⁴⁴⁾

スミスの場合はどうだろうか。パックはこう言う。「スミスは、重商主義的な支配が富める力のある者によって、また彼らのためになされていたため、当時の多くのあるいはほとんどの政府の支配や規制に反対した。しかし、スミスは厳格なレッセ・フェール支持者ではなかった。政府の能動的な政策に、積極的な役割があった。実際、労働者のためになる法律が通過するときにはいつでも、それらは公正で公平である傾向があった。当時はまだ、政府が人々を、親切に慈悲深く有益になるよう、仕向けることができたり、すべきだったりする時代だった。」⁴⁵⁾

ただ、パックによると、スミスの理解では、本来政府は財産の保護のためにあったから、政府がいつでも大衆のためになるとは限らなかった。「政府の機能とはもともと、私有財産を保護するために、富める者の富を貧しき者から保護するために、あった。私見によれば、スミスの政府への深い不信の理由はここにある。このことが、スミスをして、アリストテレスのように、福祉国家の十分な理論家にしなかったのである。」⁴⁶⁾

マルクスの場合はどうだろうか。パックの述べるところでは、労働力の再生産という観点から、マルクスにとっても、資本主義社会の政府に一定の役割はあった。「マルクスにとって、資本主義社会における国家は、一方では労働日の長さには制限を設ける必要があり、清潔と健康を維持するための工場内の最低限の労働条件を設ける必要があった。また、労働者階級の単なる物理的な再生産を継続的に保障するための、労働者を保護するための最低賃銀も必要だった。だから、非常に限定された程度ではあるが、(『資本論』における)国家は、社会全体の利益のために行為するものとみなされている。」⁴⁷⁾

とは言え、パックも認めるように「『資本論』のほとんどの部分に、国家は登場しない。」⁴⁸⁾マルクスの経済理論に話を限れば、国家や政府の役割は、ないに等しいのである。だから、マルクス経済理論にとって、国家は善でも悪でもない。

ただ、パックの述べるところでは、マルクスにとって、革命後の社会では、資本に奉仕するという国家の階級的な役割は終焉する。そうなれば、「国家は単なる行政の手段となり、市民の能力の発展の助けとなるだろう。これは、再びアリストテレスへの回帰である。」⁴⁹⁾

要するに、パックの目にする今日の社会の政府は、アリストテレス、スミス、マルクスの政府のいずれとも異なる。そして、アリストテレス、スミス、マルクスのそれぞれから批判されるべき政府になっている。今日21世紀では、社会主義の脅威がなくなったためもあるが、資本家・経営者は貪欲に貨殖術を推し進める一方、国家や政府を自らの利益のために利用するチャンスが増大している。

働く者の味方であったスミスなら、資本家・経営者をコントロールしようとする20世紀の規則や行政に対して好意的だったろう、とパックは言う。「しかし、東ヨーロッパや旧ソ連における20世紀末の共産主義の凋落とともに、共産主義の恐怖は大きく遠のいた。私見によれば、このために、富める者にとってますます資本主義国家をさらに彼らの狭義の経済的利益のために用いる傾向が強まった。こうして、21世紀において、スミスが恐れる不適切な富める者の力が、とりわけ資本家やビジネスマンのように、彼らの狭義の利益を促進するために、社会の彼ら以外の損失によって、政府を道具として用いることをたくみに追求する者の力が、まったく的を得て、洞察的であり、適切になったのである。」⁵⁰⁾

こうした、資本家・経営者による国家の利用の進展は、反面で、国家がますます労働者・大衆に不利なものへと変質してゆくことでもある。パックの言では、社会主義の脅威の喪失とともに、中程度の階級の収入は低下

してきている。社会主義の脅威は、階級闘争がある資本主義国家の賃銀を、下支えする役割を果たしていたからである。

さらに、グローバリゼーションもまた、賃銀の低下に一役買っていると、バックは言う。「グローバリゼーションの進展によっても、賃銀は沈滞してきているように見える。マルクスが指摘したように、社会の一部で規則や規制が（あるいは高賃銀が）資本に課されるならば、資本は規制のないあるいは規制の弱い社会の領域に移動する。これが、今世界で広範に起こっていることなのだ。資本主義は、とりわけ東ヨーロッパおよび旧ソ連での共産主義の終焉に伴ない、世界的な国際的なシステムである。かくして、資本は、世界のうち、規制、税、賃銀などの費用が低い部分へと移動するようになる。」⁵¹⁾

バックによれば、こうして、資本への新たなグローバルな規則や規制がない中で、先進資本主義諸国では賃銀の下方圧力が働き、他方、財産収入への税の下方圧力が働く。経済を脱規制し、資本への規制を弱める圧力も、また然りである。「経済のすべての領域での、いたるところでの、資本に対する規制の必要という問題に関し、マルクスは正しかった」⁵²⁾と、バックは言うのである。

以上のように、バックの著書の結論的部分である第4部は、今日21世紀の資本主義に関して、とりわけ資本家・経営者と、それらに利用されている国家・政府と、両者を厳しく批判するものとなっている。その場合に、アリストテレス、スミス、マルクスの発言を援用するところが、この書の特徴となっている。

むすびにかえて

本書の最後の部分には、バックによる次の言葉が置かれている。「アリストテレス、スミス、マルクスと、彼らの相違し、相争う理論体系に学ん

でくれば、それらは、定義、概念、レトリック、態度の相違にもかかわらず、互いに語り合い、またわれわれに語りかけてくることのできるものであり、また、われわれの問題の長期的な展望を行なう勇気を与えてくれるものであった。その長期的展望は、基礎的で主要な（本質的な）問題と関心事について、21世紀の初めに、それどころか第3のミレニアムの初めに、われわれに立ちはだかる問題と関心事について、経済学者（political economist）が光を当てるとき、助けになる。これら3人の偉大な体系的思想家の洞察力は、われわれが今日人間性が直面する主要な難問のいくつかに、焦点を合わせ、集中するとき、助けになりうるのだ。」⁵³⁾

この最終発言自体には、大まかに言って、異論はないだろう。ただ、本書全体の構成と方法について振り返ると、問題がないわけではない。

第一に、すでに指摘したことだが、アリストテレスを経済論の創始者とし、アダム・スミスをアリストテレスへのある種反対者とみなし、スミスを批判するマルクスをアリストテレスへの回帰と捉える、という本書の構成に問題がある。

細かく言うと、アリストテレスを経済論の創始者とするのはとりあえずいいとしても、スミスの経済理論をアリストテレスへの反対という面から理解する、という視角は狭すぎるであろう。貨殖術に限定するにしても、スミスが貨殖術を力強く肯定して見せる相手は、遠くアリストテレスではありえない。もっと近い、たぶんはカソリシズムなり、カソリシズムに影響された言論状況だったであろう。

次いで、マルクスのスミス批判を、貨殖術に引き付けて理解するのも、問題である。マルクスの経済理論において、貨殖術は、そもそも批判の対象にのぼらないからである。マルクス理論では、資本家が利潤を飽くなく追求するのは、資本家の徳性の問題ではない。マルクスにとって、資本家は資本の人格化であるから、それが利潤を追求するのは当然であり、そうするものとして理論的に想定されているのである。マルクスも、博愛的な

資本家が世に存在すること（たとえばロバート・オウエン）を知悉しながら、こういう想定を行なっているものであり、そのことがマルクス理論の長所となっているわけである。

アリストテレス、スミス、マルクスを、いわゆる「正反合」のように再構成しようとする、バックの構想に無理があるのである。

第二に、21世紀の状況を批判するのに、アリストテレスやスミスやマルクスの発言をそのまま用いるところに問題がある。

先人の言葉は先人の時代にのみ有効、などと言いたいわけではない。先人の言葉も、時代を超えて、現代に届く場合はある。とりわけ、人倫に関わるものはそうであり、だからこそ、先哲の言葉が今でも学ばれるわけである。

ただし、現代を批判するのに、バックのように、アメリカを初めとする先進資本主義国の資本家・経営者を批判するのに、その典拠として、アリストテレスが言っているからとか、スミスが言っているからとか、マルクスが言っているからとか、直接に上げることが有効とは思えない。アリストテレスやスミスやマルクスが権威となるのは、一部の専門家に限られる。

バックの著書の序文にさかのぼると、こういう叙述がある。「困難や問題に逢着したとき、こうたずねるのが有益かも知れない（実際有益であろう）。アダム・スミスなら（おそらく）何と言っただろうか。アリストテレスなら（おそらく）何と言っただろうか、マルクスなら（おそらく）何と言っただろうか。」⁵⁴⁾

そのように先人にたずねること自体はいい。しかし、バックならバックが、先人にたずねた答えの言葉を現代に伝えた場合、その言葉は、バックの言葉としてしか受け止められないであろう。その言葉の有効性の如何は、先人ではなく、バックに多くが帰することになる。

先人の言葉に学ぶとしても、それを現代の状況の中で新たな意味で回復し、新たな言葉として発するのでなければ、先人の言葉を真に回復したこ

とにはならない。また、そうでなければ、先人に学ぶ甲斐もない。決して容易ではないが、先人に学ぶ者は、そこを目指すべきであろう。古典の読み方の本当のむずかしさは、ここにある。

註

- 1) Spencer J. Pack, *Aristotle, Adam Smith and Karl Marx* (Cheltenham, Edward Elgar, 2010).
- 2) *Ibid.*, p. x i.
- 3) *Ibid.*
- 4) *Ibid.*
- 5) *Ibid.*, p.15.
- 6) アリストテレス／山本光雄訳『政治学』（『アリストテレス全集第15巻』、岩波書店、1969年）28-29頁。
- 7) アリストテレス／加藤信朗訳『ニコマコス倫理学』（『アリストテレス全集』第13巻、岩波書店、1973年）157頁。
- 8) Pack, *op. cit.*, p.17.
- 9) *Ibid.*, p.18.
- 10) *Ibid.* p.17.
- 11) アリストテレス／上掲『政治学』26-27頁。
- 12) 上掲、171頁。
- 13) Pack, *op. cit.*, p.40.
- 14) アリストテレス／上掲『政治学』114頁。
- 15) Pack, *op. cit.*, p.41.
- 16) アリストテレス／上掲、『政治学』171-173頁。
- 17) Pack, *op. cit.*, p.13.
- 18) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of Wealth of Nations*, The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith, Vol.II-1 (Oxford University Press, 1976) p.72. 水田洋訳『国富論』第1巻（岩波文庫、2000年）103頁。
- 19) Pack, *op. cit.*, p.62-64.
- 20) *Ibid.*, p.64.
- 21) *Ibid.*, p.61-62.
- 22) *Ibid.*, p.63.
- 23) *Ibid.*, p.68.
- 24) Smith, *op. cit.*, p.412. 上掲『国富論』第2巻（岩波文庫、2000年）235頁。
- 25) *Ibid.*, p.266. 上掲『国富論』第1巻、434頁。

- 26) Pack, *op. cit.*, p.72.
- 27) Smith, *op. cit.*, p.19. 上掲『国富論』第1巻、31頁。
- 28) Pack, *op. cit.*, p.86.
- 29) *Ibid.*, p.93.
- 30) *Ibid.*, p.91.
- 31) *Ibid.*, p.109.
- 32) Karl Marx, *Das Kapital; Kritik der politischen Ökonomie*, Marx Engels Werke Bd.23, (Berlin, Dietz, 1962) S.146-147. 岡崎次郎訳『資本論』第1巻 (『マルクス・エンゲルス全集』第23巻、大月書店、1965年) 172頁。
- 33) Pack, *op. cit.*, p.124.
- 34) Pack, *op. cit.*, p.135. Marx, a.a.O., S.16. 上掲、『資本論』10頁。
- 35) Pack, *op. cit.*, p.135. Marx, a.a.O., S.99-100. 上掲、『資本論』113頁。
- 36) Pack, *op. cit.*, p.137.
- 37) Pack, *op. cit.*, p.141. Marx, a.a.O., S.386. 上掲、『資本論』478頁。
- 38) Pack, *op. cit.*, p.197.
- 39) *Ibid.*, p.200-201.
- 40) *Ibid.*, p.201.
- 41) *Ibid.*, p.201-202.
- 42) *Ibid.*, p.195.
- 43) *Ibid.*, p.203.
- 44) *Ibid.*
- 45) *Ibid.*
- 46) *Ibid.*, p.204.
- 47) *Ibid.*
- 48) *Ibid.*
- 49) *Ibid.*, p.205.
- 50) *Ibid.*, p.206.
- 51) *Ibid.*, p.212.
- 52) *Ibid.*, p.213.
- 53) *Ibid.*, p.227.
- 54) *Ibid.*, p. x.